

## ローマ9章1-13節 「イスラエルの不信仰」

### 1A パウロの悲しみ 1-5

1B 身代わりの呪い 1-3

2B イスラエルの特権 4-5

### 2A 有効な御言葉 6-13

1B 約束 6-9

2B 選び 10-13

## 本文

ローマ人への手紙9章に入ります。私たちの学びは、信仰による義について、神の救いについて佳境に入ります。それは、「神のイスラエルの救い」についてであります。9章から11章までに至っています。

私たちは8章において、神のご計画の確かさについて学ぶことができました。神は、ご計画に従って、全てのことを働かせて益としてくださいます。そして、あらかじめ私たちをキリストに似る者として定めてくださり、栄光の姿に変えられることも計画してくださいました。それゆえ、どのような被造物も、私たちに敵対することはできず、私たちをキリスト・イエスにある神の愛から引き離すことはできません。キリストを信じる者に対する祝福と約束は、このように栄光に富んでいます。

しかし、そこから大きな問題に直面します。このような祝福と約束は、聖書によると、まずユダヤ人に対するものだからです。パウロは、この手紙を書き始めるとき、「福音はユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。(1:16)」と言いました。ユダヤ人がまず、この祝福にあずかるべきでした。しかし、パウロは「すべての人に」という言葉をずっと強調していきます。ユダヤ人が、律法を守っているがゆえに、また割礼を受けているゆえに神の国に入ることができる、義と認められていると思われていたところが、そうではなくて、彼らもまた律法を守っていないので、罪の下にいるのだ。3章19節には、「さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。」とありました。ですから、ユダヤ人と異邦人には差別がなく、ただキリストのところに来て、その信仰によって義と認められるのです。

けれども、主はアブラハムを召され、イサクが約束の子であり、ヤコブが選ばれて、それで十二人の息子から出てきた十二部族によって、そのイスラエルに救いを与えて、それですべての国民を祝福されるはずでした。主が地上に来られた時に、「イスラエルの家の滅びた羊のところに行きなさい。(マタイ10:6)」と言われていました。ところが、そのユダヤ人の宗教指導者たちがイエスが、イスラエルを救うメシヤではない、そう主張しているだけだとして拒みました。それによって、イエス

様は、彼らが退かれることを宣言されました。「マタイ 21:43 だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。」そして主は、復活された後に弟子たちに対して、「28:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。」と言われたのです。もはやイスラエルだけでなく、あらゆる国の人々を弟子とします。

そして使徒の働きを見ると、エルサレムにいるユダヤ人の弟子たちに聖霊が下り、それからユダヤ人たちが悔い改め、バプテスマを受けました。そして迫害があり、地方に散り散りになり、そして異邦人にも福音を伝えるようになりました。そして、ペテロがローマの百人隊長コルネリオに伝道して、それで彼にも聖霊が降りました。主が、異邦人をも顧みて、彼らが神を信じることのみによって、心が清められることを知ったのです。そして主は、パウロを捕えました。彼を異邦人への使徒とされました。パウロはユダヤ人の会堂で伝道するのですが、改宗者として来ていた異邦人たちのほうが信じて、ユダヤ人の不信者は妬み、彼を迫害しました。このような形で、ユダヤ人の信者だけでなく、異邦人の信者も起こされて、それでユダヤ人も異邦人も集う教会が形成されていきます。そして、ローマにある教会もどちらもある教会となったのでしょうか。

パウロの宣教で、小アジアにあるピシデヤというところにあるアンティオケで、こういう出来事が起こりました。「使徒 13:44-47 次の安息日には、ほとんど町中の人々が、神のことばを聞きに集まって来た。しかし、この群衆を見たユダヤ人たちは、ねたみに燃え、パウロの話に反対して、口ぎたなくののしった。そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。なぜなら、主は私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを立てて、異邦人の光とした。あなたが地の果てまでも救いをもたらすためである。』」ユダヤ人が拒み、そして異邦人に神の救いをもたらされます。

したがって、神の救いのご計画が確かであるはずなのに、それでもイスラエルが拒んでいるという現実に対して、パウロは圧倒されているのです。このことが確かなものであることが証明されなければ、神の義、神の正しさが歪められているようにさえ見えます。そこで9章から11章までにおいて、神のイスラエルに対する救いについて論じます。9章においては、神の主権について教えています。ユダヤ人が拒んでいることには、その背後に神の主権があるということです。そして10章においては、福音を聞いてそれを信じるという応答について論じています。彼らが頑なであるのに神の主権があるからと言って、彼らに責任がないということでは全然ありません。信じるという応答が必要です。そして11章において、彼らが福音に敵対しているのは一時的であるという希望について話しています。彼らが頑なにされているけれども、それは異邦人に救いが広がるためであり、そして彼らも最後には救われるという計画です。

## 1A パウロの悲しみ 1-5

では初めに、パウロがこの話題、課題を語り始めているところを見ていきましょう。

### 1B 身代わりの呪い 1-3

1 私はキリストにあつて眞実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかしています。2 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。3 もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。

「私はキリストにあつて眞実を言い、偽りを言いません。」と、自分の心の痛みについて前置きをしています。なぜなら、パウロはユダヤ人の不信仰を明らかにし、異邦人の救いを証言していく中で、ユダヤ人を憎んでいるのではないかという批判を受けていたのではないかと思われるからです。ユダヤ人からねたまれ、ののしりを受け、迫害を受けました。だからパウロが、ユダヤ人を憎んでいるのでは、と考える人がいたかもしれませんが、決してそんなことはなく、むしろ、彼らに対する愛は、とてつもなく激しかったのです。

「私の良心も、聖霊によってあかしています。」と言っていますが、これはユダヤ教のラビであったパウロならではの言いまわしです。イエス様は、誰かを戒める時に二人、三人の証人が必要であることを語られましたが、申命記 19 章 15 節にそのことが書かれているからです。「どんな咎でも、どんな罪でも、すべて人が犯した罪は、ひとりの証人によっては立証されない。ふたりの証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。」パウロは、自分の良心を一人の証人に、聖霊をもう一人の証人にしています。

そして大きな悲しみがあり、痛みが心に絶えずあるのですが、「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたい」とまで言っています。つまり、彼らが救われるのであれば、自分が地獄に行っても良いと願ったのです。8 章の終わりで、「何物も、キリストにある神の愛から引き離すことはできない。」と言ったにも関わらず、です。このように身代わりになりたいと思うほどの執り成しが、パウロの心の中に重くのしかかっていた。手紙を書き始めたところからあったことでしょう。このような身代わりになってもよいという執り成しは、モーセの中にもありました。金の子牛を拝んで次々と殺されていったイスラエル人を見て、こう執り成しをしました。「ああ、この民は大きな罪を犯してしまいました。自分たちのために金の神を造ったのです。今、もし、彼らの罪をお赦しくださるものなら…。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。(出エジプト 32:31-32)」

### 2B イスラエルの特権 4-5

4 彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、

約束も彼らのものです。5 先祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上であり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。

パウロが痛みを感じているのは、先に話しましたように、ローマ書 9 章までで話した神の祝福をはじめ、その他のあらゆる特権がイスラエル人に与えられているからです。これら一つ一つを語るなら、旧約聖書全体を話さなければいけません。けれども、かいつまんで話しましょう。第一に、彼らは子とされました。主はモーセに、「イスラエルはわたしの子、わたしの初子である。(出エジプト 4:22)」と言われました。彼らを養い、見張り、ご自分のひとみのようにイスラエルを守られました(申命 32:10)。第二に、彼らには「神の栄光」が与えられました。イスラエルが荒野を旅しているとき、昼は雲の柱が彼らを導き、夜は火の柱が与えられました。幕屋が建てられてからは、主は至聖所においてご自分の栄光を現わし、民の真ん中にとともにいてくださいました。ソロモンが神殿を建てたときも、主の栄光が宮に満ちて、祭司たちがそこに入ることができないほどだったのです。

第三に「契約」です。男女の関係が結婚の誓約によって、その愛が確固としたものになるように、神はイスラエルと契約を結ばれ、その関係を揺るぎ無いものとされました。最初に、アブラハムに契約を与えられました。土地の所有、子孫の繁栄、そして国家の建設の約束を与えられ、そのしるしとして割礼を授けさせました。そしてモーセによる契約もあります。さらに、神はダビデに対して、その王座からメシヤを出すという契約を結ばれました。さらに、預言者エレミヤをとおして、モーセに与えられた古い契約に代わる、新しい契約をイスラエルに与えることを、神は約束されました。このように、イスラエルは、契約によって神と結ばれている民であります。

第四に「律法」ですが、これは、今話した古い契約であります。律法を守り行なえば祝福を受ける、という条件付きのものであり、これはキリストが現れた今、その役目を終えました。第五に「礼拝」です。これは、レビ記に詳しく書かれている、幕屋における礼拝のことです。動物のいけにえ、きよめの儀式、祭司の務めなどは、イスラエルに与えられました。第六に「約束」です、聖書は約束に満ちています。アブラハムに対して、とてつもなく大きい祝福の約束を与えられました。そして第七に、「先祖」も彼らのものである、と言っています。これは、アブラハム、イサク、ヤコブのことです。アブラハム、イサク、ヤコブの子孫がユダヤ民族となりました。そして、最後に、キリストあるいはメシヤは、人としてはイスラエルから出てこられました。私たちの主イエス・キリストはユダヤ人なのです。私たちは、ユダヤ人であるイエスを、自分の主、救い主としてあがめています。

そして、パウロは、キリストにふれたので、この方が神であること認めて、賛美しています。このように、聖書は、イスラエルに対する祝福で満ちています。なのに、彼らは、神の義に到達することができていない。そのため、パウロの心は痛み、悲しんでいるのです。

## **2A 有効な御言葉 6-13**

そしてパウロは、このような事実によって神の真実が無き物にされたのではないことを証明して

いきます。

### 1B 約束 6-9

6 しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、7 アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」のだからです。

パウロは、イスラエルが全体として福音を信じていないのは、それは神のみことばが無効になったからではなく、むしろ、神に召し出されたユダヤ人のみが、福音を信じるようにされている、と述べています。その実例として、アブラハムから生まれたイサクとイシュマエルを挙げています。イシュマエルもアブラハムから生まれました。けれども、アブラハムの子どもとみなされたのは、イサクのみです。イサクをささげなさい、と主がアブラハムに命じられたとき、「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。(創世 22:2)」と言われました。神の約束にしたがって召されている者だけが、まことのイスラエルになることができるということです。ですから、パウロのように、肉においてユダヤ人であって、なおのこと神の約束によって召しを受けていることで、確かに完成されたイスラエル人と言うことができるでしょう。

8 すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。

9 約束のみことばはこうです。「私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。」

神の子どもと呼ばれるのは血縁関係によるのではなく、むしろ神の約束によって子どもとなります。「ヨハネ 1:11-13 この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」最後には、イスラエル人もみな救われる、すなわち民族的に救いに召されて、応答して約束の子どもとされています。しかし、今は、イシュマエルではなくイサクが約束の子であったように、イエスを信じるユダヤ人たちが、約束の子ということになるのです。

この原則は、私たち異邦人にも当てはめることができます。親がクリスチャンであるということは、その人に救いを保障しません。また教会に通って、その仲間に入っていることであっても、保障とはなりません。飽くまでも、神の約束に基づいて召された者たちだけが救われているのです。

### 2B 選び 10-13

10 このことだけでなく、私たちの先祖イサクひとりによってみごもったりベカのこともあります。11 その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行なわないうちに、神の選びの計画の確かさが、行ないにはよらず、召してくださる方によるようにと、12 「兄は弟に仕える。」と彼女に告げられたのです。13 「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。」と書いてあるとおりです。

パウロは、神の約束があつて召されたからこそ、救いのご計画に入っているという話から、さらに突っ込んで、その中に神の選びのご計画があるのだという真理を説き明かしています。イシュマエルではなくイサクが選ばれました。そして、イサクからエサウとヤコブが生まれましたが、ヤコブが選ばれました。同じように、肉のイスラエル人の中でも救いに選ばれる者たちがいる一方で、退けられた者たちもいるのだということなのです。

神がエサウではなくヤコブを選ばれるとき、それはヤコブが何か良いことをして、エサウが悪いことを行なったから選ばれたのではなく、神ご自身がご自分の思いでヤコブを選ばれました。そのことを証明するために、「まだ生まれてもおらず、善も悪も行なわないうちに、神の選びの計画の確かさが、行ないにはよらず、召してくださる方によるようにと、12「兄は弟に仕える。」と彼女に告げられたのです。」とあるのです。このことについて、私たちは反発します。それでは、私たち人間には選択が与えられていないのか。一部の者だけが選ばれて、選ばれていない者は地獄に行くのか、と反発してしまうのです。

けれども、聖書は、神が選ばれたことについて多くを語っていますが、選ばれていないことについては、何一つ語っていません。むしろ、神は、すべての人が救われることを望んでおられる、とパウロは言っています。「1テモテ 2:4 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」つまり、神の選びのことを考えるとき、私たちは次のことを考えればよいのです。「自分は神に愛されている。」と言うことです。自分が何か良いことをしているから救われたのではなく、また愛されるべきものがあるから救われたのではなく、ただ神が愛しておられるから救われたのです。「2テサロニケ 2:13 主に愛されている兄弟たち。神は、御霊による聖めと、真理による信仰によって、あなたがたを、初めから救いにお選びになったからです。」

あるテレビ番組で、二人兄弟を養子にもらった夫婦のことが取材されていました。ずっと奥さんが不妊だったからです。けれども、養子にもらったとたん、子どもが生まれてしまいました。三人の女の子です。奥さんはアメリカ人、だんなさんは日本人なので、養子は髪の毛が黒く、生まれてきた子たちは、茶髪をしていました。そこで、養子の子が、少し大きくなって、そのことを親に聞きました。その解答に悩み苦しんだあげく、母親は、「私たちは、施設で、いろいろな子どもがいたのにもかかわらず、あなたたちを選んだんだよ。だから、あなたたちは、愛されて私たちの子どもになったのだよ。」と答えたそうです。選びの背後には愛があるのです。ですから、ヤコブもまず神に愛されて、何も良いことを行なわないうちに選ばれました。

こうして、ユダヤ人が全体としてイエスさまをメシヤとして信じない理由がわかりました。神が、そのユダヤ人の中から、ご自分の選びによって、一部のユダヤ人にのみ福音を信じるようにされた、ということです。ですから、神のみことばが無効になったのではなく、むしろ、神のご計画が実行されているのです。